

りそな外為レポート

りそな WEEKLY COLUMN

りそな外為レポート

市場を落ち着かせチャイナ！ (P2)

りそな銀行 市場トレーディング室
カスタマーディーラー 伊藤 一輝

今週のドル円予想レンジ **108.70 ~ 110.20**

りそなWEEKLY COLUMN

Don't Look Back (on BREXIT) In Anger (P3)

りそな銀行 総合資金部
マネージャー 浦本遼平

- 英国のEU離脱とBritpop（英国の大衆音楽）の関係 ???
- マンチェスター市民から見習うべき“冷静さ”

2020/2/10

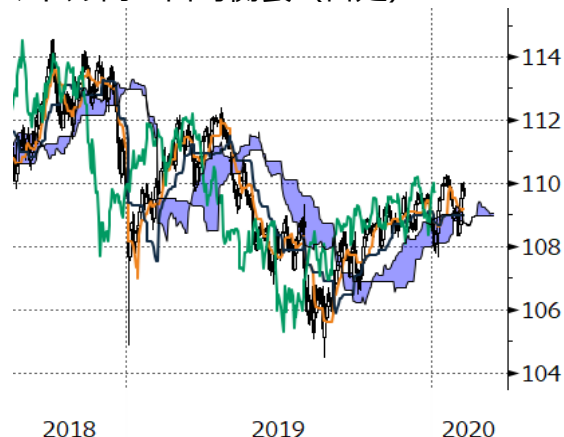
りそな外為レポート

市場を落ち着かせチャイナ!

今週のドル円予想レンジ **108.70 ~ 110.20**

(りそな銀行市場トレーディング室予想 発行当日の10時時点)

◆ドル円一目均衡表（日足）



◆為替相場のすすめ

先週末のドル円は主に109円台後半での推移。雇用統計は強い結果となりドル高も、新型肺炎の影響見極めの動きもあり円も強含んだ。中国は先週初に大規模な流動性の供給を実施。春節明けの金融市場の混乱回避にひとまず成功した。新型肺炎の特効薬が見つかったとのヘッドラインも手伝って、ドル円や主要国株式は急ピッチで買い戻された。ただし、やや長い目で見れば主要国の経済活動への影響は否めず、今後のドル円は上昇一辺倒、とはなりにくい。

今週のドル円は、材料探しによる穏やかな値動きを予想する。個人的に注目するのは、米国FRB新理事2名の公聴会。トランプ大統領お墨付きのシェルトン氏・ウォラー氏は追加緩和に肯定的と噂される。仮にFRB入りが承認となれば、来月の会合に参加する可能性もあるとのこと。新型肺炎の影響が長期化して米国の消費等に悪影響が出た場合、利下げへのハードルは低くなるかもしれない。

(為替予想と偏頭痛に悩むディーラー 伊藤 一輝)

◆今週の日程

10日(月) 日	1月景気ウォッチャー調査
11日(火) 米	3年国債入札
12日(水) 米	10年国債入札
12日(水) 米	ニューハンプシャー州民主党予備選
13日(木) 米	1月CPI

13日(木) 米	30年国債入札
14日(金) 欧	19/4Q GDP
14日(金) 米	1月小売売上高
14日(金) 米	1月鉱工業生産
14日(金) 米	2月ミシガン大消費者信頼感指数

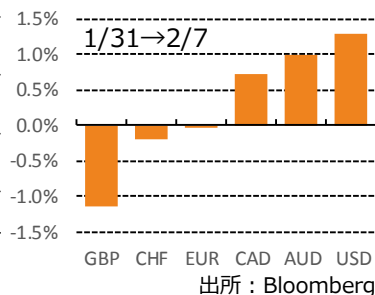
◆今週の予想 (ドル高 強い ↑ 普通 ↑ ドル安 強い ↓ 普通 ↓) NY引け値 2月7日(金) 108.35円 VS 2月14日(金)

東京							大阪				埼玉					
尾股	中根	湊	井口	鳥井	田中	高尾	中里	伊藤	佐藤	鈴木	武富	野瀬	小林	津田	石井	伊藤
↓	↓	↓	↓	↓	休	↓	休	↓	↓	↓	↑	↓	↑	↑	↑	↓

◆先週の動き



主要通貨対円パフォーマンス



◎注意事項
お問い合わせは、取引店の担当者までご連絡ください。当資料に記載された情報は信頼に足る情報源から得たデータ等に基づいて作成しておりますが、その内容については明示されていると否とにかかわらず、弊社がその正確性、確実性を保証するものではありません。また、ここに記載された内容が事前の連絡なしに変更されることもあります。また、当資料は情報提供を目的としており、金融商品等の売買を勧誘するものではありません。取引時期などの最終決定はお客様ご自身の判断でなされるようお願いいたします。

2020/2/10

りそな WEEKLY COLUMN

Don't Look Back (on BREXIT) In Anger

- 英国のEU離脱とBritpop（英国の大衆音楽）の関係???
- マンチェスター市民から見習うべき“冷静さ”

りそな銀行 総合資金部
マネージャー 浦本遼平

マンチェスターアリーナ
の大規模テロから間もなく3年

2017年5月22日、英国のマンチェスターで自爆テロが起きました。現場は21,000人収容できるマンチェスターアリーナ。事件当日は米国で活躍する女性歌手、アリアナ・グランデのライブ会場として使われていました。イスラム国が犯行声明を出したこのテロは、実行犯を含め死者は23人、負傷者は120人を超える大規模なもので、世界を震撼させました。

翌23日、マンチェスターの中心にある聖アン広場には犠牲者を追悼すべく多くの市民が集まりました。そこで一人の女性が歌い始めます。英国のロックバンド、OASISの1996年のヒット曲“Don't Look Back In Anger”です。たった一人の歌声は群衆を巻き込み、ついには広場全体で合唱が始まり、その様子を捉えた映像は瞬く間にTwitterでシェアされ、英国各地の追悼イベントで歌われるようになり、さらには世界中にまで広がりました。

事件直後に開催されたアリアナ・グランデが主催するチャリティライブでもDon't Look Back In Angerが歌われました。また1年後にフランスで開催されたサッカーのイングランドVSフランスでの選手の入場曲として仏共和国親衛隊のプラスバンドが演奏し、多くのフランス人サポーターが対戦相手のイングランドの国旗を掲げました。

「怒りで過去を振り返るな」と歌うこの曲は国境や人種を超えて、平和を願う人々のアンセムとなり、世界を「団結」させたのです。

ところが世界中の人々を「団結」させたOASISの代表曲も実は「英国EU離脱(BREXIT)」の一因となったのではないかと一見矛盾した記事を英国の新聞、“The Guardian”が発表しています。

「Don't look back in anger: did Britpop cause Brexit?」というタイトルです。
(<https://www.theguardian.com/music/2018/nov/22/dont-look-back-in-anger-did-britpop-cause-brexit>)。

記事ではBritpop（英国の大衆音楽）がもつ郷愁的な感覚が、他国の音楽とは一線を画しているという感覚とも相俟って、英国の人々にナショナリズムを許容し易くしたと分析しています。こうしたBritpopの持つ社会的な力によって、英国国民はEU離脱を選択したのではないかと書かれています。

BRITPOPがBREXITの
原因？

2020/2/10

りそな WEEKLY COLUMN

もちろん音楽だけでBREXITが決まったわけではありませんし、アーティスト達はナショナリズムを煽るために歌っているつもりもないでしょう。しかし、2012年のロンドンオリンピックの開閉会式で、英国出身の錚々たるアーティスト達が立て続けに出演し、Britpopを世界に強くアピールしていたことが思い出されます。Britpopは、英国国民に強く根づいている文化であり、BREXITを考えるうえで、一つの参考になります。

MancunianとBREXIT

一般的には、BREXITの主な原因について、EU各国から流入した移民と英国の地元の人々との間で、雇用や住宅において競合してしまった事が言われています。テロの起きたマンチェスターは古くから労働者階級が多くいる地域と知られ、移民による雇用環境悪化に焦点が当たりやすい地域です。しかし、意外にもマンチェスターにおける国民投票の結果は、“残留”が多数を占めました。残虐なテロが起きても“Don't Look Back In Anger”を誇らしく歌い上げる“Mancunian”（マンチェスター市民の呼称）は、Britpopに起因するナショナリズムを上回る、EU残留に投票するような強い“冷静さ”があったのかもしれませんが。Don't Look Back In Angerを作詞作曲したノエル・ギャラガーもマンチェスターの労働者階級出身ですが、EU残留派です。彼もまた国民投票で離脱が決まった以上、受け入れるのが民主主義だと冷静な発言をしています。

冷静なMancunianを見習って、、、

2020年1月31日に英国はEUからついに離脱し、現在は離脱に向けた移行期間に入っています。英国とEUは、FTA（自由貿易協定）を移行期間が終わる2020年12月31日までの短期間で、合意しなくてはなりません（通常は数年かかると言われています）。しかも英国のジョンソン首相は移行期間の延長はしないと強気の姿勢です。BREXITは実施されましたが、今後のマーケットに与える影響は依然として不透明感が強いのです。

BREXITは何度もマーケットを混乱させてきた経緯があるので、われわれ市場参加者からすれば「BREXIT」という単語に正直ポジティブな印象を抱きません。ただ日本人の私が英国の将来に口を出す権利はありませんし、英国の人々の選択を尊重すべきです。先行きの不透明感が強いからと言って、一度決まったBREXITをイライラしながら振り返っても意味はありません。悲惨なテロを経験しても感情的にならずに冷静に振舞ったMancunianを見習い、“Don't Look Back In Anger”を頭の片隅で流しながら、私も常に冷静な判断ができるようマーケット業務に臨みたいと思います。（OASIS再結成しないかなあ、、、）

